

『今月の天候と農作業』

通巻第5700号

6月号

令和7年6月5日発行

宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。

<1 週目の予報> 6月7日(土)～ 6月13日(金)

梅雨前線の影響を受けやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう

<2 週目の予報> 6月14(土)～ 6月20日(金)

太平洋高気圧に覆われやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 6月21日(土)～ 7月4日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 追肥と水管理

コシヒカリは倒伏しやすいため、幼穂長1cmの適期に葉色を見ながら、追肥しましょう。

幼穂形成期の水管理は、間断かん水を基本とします。ただし、気温が16℃以下になることが予想される場合には、幼穂を低温から保護するために、深水にしましょう。

2 病虫害対策

いもち病は穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本とし、多発時には臨機防除を行います。

カメムシ類は、穂ぞろい期とその7～10日後の2回の防除を行います。地域ごとの一斉防除が効果的です。また、カメムシ類の繁殖源である畦畔や周辺草地の草刈りを出穂の2～3週間前迄に実施することで防除効果が高まります。

◆普通期水稻

1 基肥と代かき、田植

基肥は、地力や堆肥の散布量などから施肥量を決めます。

代かきは、除草剤の効果を高めるために田面が均平になるように行いましょう。

田植は、栽植密度や苗の掻き取り量、植付け深さなどに注意します。

2 病虫害対策と除草

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）が多い水田では、薬剤による防除や浅水管理を実施しましょう。

除草剤は、ラベルの記載内容を必ず確認し、ヒエの葉齢を見て、散布遅れがないようにします。処理後7日間は掛け流しせず止水します。ジャンボ剤は必ず5cm以上の水深を確保しましょう。また、田植同時処理では、田面の均平や植付深度、田植後の土の戻りに注意し、田植後は速やかに入水しましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

◆収穫終了後の管理

アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類等が媒介するウイルス病が問題となるため、栽培終了時には、次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから次作に向けたほ場準備を行いましょう。

また、ハウス内の作物残さを持ち出す前には、ハウスを１０日間閉め込んで蒸し込み処理を行うなど、害虫を死滅させた上で残さを持ち出すようにします。特にウイルス病が発生したハウスでは、周辺雑草の除草を徹底します。

◆夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病虫害の発生が予想されます。次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ① 通路や畝間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行います。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果などを中心に摘果を行います。
- ③ 追肥は１回当たりの窒素成分量を少なくします。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図ります。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適期に行い、過繁茂を防ぎ通風や採光を良くします。
- ⑤ 大雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を行います。

また、曇雨天が続いた後、急に晴れた場合は、「葉やけ」や「萎れ」が発生しやすくなるため、強い日射に備えて、遮光のための寒冷紗などを準備しましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆共通（排水対策）

多雨による土壌の流亡や、排水不良が懸念されるため、適宜、点検・整備を行います。畝間に雨水が溜まると、根傷みや病害の発生を助長するため、排水を良くしましょう。

◆かんしょ

トンネル栽培は収穫期になります。試し堀を行い、芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植付け後１３０日以上になると芋の皮色や形状が悪くなるため、適期収

穫を心がけましょう。

普通栽培では通路につるが伸びる前に、通路に除草剤を散布します。また、「黄化」や「萎れ」のある株は、地際部に割れや黒変がないかを確認し、症状がある場合は病害の可能性が高いため、速やかに除去します。除去した周辺の株には薬剤の予防散布を行います。降雨が長期間続く時は、雨間に薬剤による防除をしましょう。

苗取りが終わった育苗床は、速やかに片付けます。病害対策として可能な限り育苗床に残った種芋を持ち出します。持ち出せない場合は、分解促進資材や石灰窒素を散布し、土壤水分を確保した上ですき込み、分解を促進します。

◆さといも

トンネル栽培は収穫期になります。試し堀を行い、10aの換算収量が1tに達したら収穫を始めましょう。

さといもの重要病害である疫病の蔓延を防ぐために、収穫後は速やかに耕耘して残さをすき込みましょう。

また、収穫前のほ場では、疫病の発生を防止するため、薬剤が株元までかかるように散布しましょう。

(倉永 泰代)

果樹

I 常緑果樹

◆温州みかん

今年の極早生品種の着花量は平年より多い傾向でしたが、園地や樹によって着花のばらつきが見られました。今後の天候や生理落果の状況によりますが、果実品質の向上や樹勢回復のためにも、6月中旬頃から、小玉果や内成り果を中心とした粗摘果を徹底し、中玉以上の果実生産をめざしましょう。

◆かんきつ全般

梅雨に入ると、黒点病の防除が特に重要です。薬剤散布から300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があったら、次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上旬には必ず薬剤散布を行い、密度を減らしましょう。

◆完熟きんかん

6月下旬の1番花の結果率を上げることで、大玉果の生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温により十分な温度を確保しましょう。安定した結果量を確保するには受粉環境が重要です。開花期に雨天が続く場合は、ビニル被覆を実施し、昼間も加温しましょう。

◆マンゴー

梅雨時期に入ると湿度が高く推移し、炭そ病や軸腐病の発生増加が心配されます。こまめな収穫や、殺菌剤の散布、適正な温湿度管理等の対策を徹底しましょう。また、曇雨天日後の急な強い日射により、日焼け果やあざ果が発生する場合があります。日焼け対策として遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定作業に入ります。樹齢の進行に伴い、収量や果実品質が低下している園では、改植を検討しましょう。

2 落葉果樹

◆くり・かき

安定生産のためには施肥が重要です。夏肥の施用を必ず行いましょう。特に樹勢の低下防止、果実の肥大促進、翌年の結果母枝の充実に有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天時には、葉焼けの発生が多くなります。事前にカルシウム剤の葉面散布等を行い、当日は換気や遮光、葉水等の対策を実施します。

「フローラル優香」の8月出荷作型では、開花促進のため、消灯後から3週間程度シェード（12時間日長）を実施します。なお、貫生花の発生を軽減するため、夜間にシェードを開放する等の高温防止対策を実施します。

「精の一世」の8月出荷作型では、6月10日前後が消灯日となるため、消灯後にシェード（11.5時間日長）を実施します。高温による開花の遅延防止のため、日中の遮光や換気、夜間のシェード開放等の高温防止対策を実施します。

◆秋ギク

親株を育成する時期です。健全な穂を確保し親株のほ場での防除の徹底等により、

白さび病等の罹病株を本ばへ持ち込まないように留意しましょう。

◆デルフィニウム

１１～１２月出荷作型の育苗作業が始まります。

早期抽だい防止のため、夜冷育苗を、本葉２枚展開時から１６時間、１０℃で行います。健全苗の育苗のために適切なかん水や施肥管理を実施しましょう。

◆ホオズキ

７月出荷作型では、着色促進のためにホルモン剤を処理する時期です。できるだけ涼しい時間帯に散布し、散布前後の数日は寒冷紗等で遮光して、高温防止の対策を実施しましょう。

また、着色ムラや薬害の原因となることから、ホルモン剤と他の農薬の近接散布は避けましょう。

◆シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染のリスクが最も高くなる時期です。適期防除を実施しましょう。

◆キイチゴ

多湿条件下では、べと病や斑点性病害の発生が多くなります。定期的な予防散布を行いましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

先月、県内では豚熱（ＣＳＦ）に感染した野生イノシシが確認されました。国外では様々な家畜伝染病が確認されており、国内への侵入リスクは依然として高い状態が続いています。

家畜伝染病から農場を守るため、農場にウイルスを侵入させないよう、畜舎内外の消毒や人・車両・物資の消毒、野生動物等の侵入防止対策を徹底するなど、飼養衛生管理基準に基づき飼養管理を行いましょう。

◆家畜

雨が多くなり、気温と湿度がともに上昇し、家畜が暑熱ストレスを感じる時期にな

ります。本格的な暑さを迎える前に、畜舎周辺の環境整備や換気扇の清掃を行い、風通しを良くするなど、早めに暑熱対策を始めることが重要です。

中でも、乳用牛は暑熱ストレスの影響を受けやすく、乾物摂取量の減少による乳量・乳質の低下から、生産性が低下する傾向にあります。換気扇や扇風機等で風を牛体に当てて体感温度を下げたり、直射日光や輻射熱を抑えるために、寒冷紗等の設置、屋根への石灰や断熱塗料の塗布を行うなど、複数の対策を組み合わせ、徹底した暑熱対策を行いましょう。

また、高温多湿により飼料が腐敗しやすい時期になります。カビの発生が見られた場合には、その飼料は給与しないようにしましょう。汚れた餌槽や水槽は、カビの増殖や家畜の食欲低下を招きます。こまめに清掃を行いましょう。

◆飼料作物

トウモロコシやソルガム等などの春夏作が播種～生育期を迎えています。長雨によるほ場の排水不良や病害虫の発生が起こりやすい時期です。定期的に生育状況を確認し、必要に応じて適切な排水対策や防除対策を実施しましょう。

(長瀬 朋子)

特用作物

◆茶

1 二番茶の摘採と整枝

二番茶は生育スピードが早いいため摘採適期が短くなります。また、降雨日が多くなるため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れにならないよう適期摘採に努めましょう。

樹勢の強い茶園では、摘採前に7日間ほど黒色寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図ります。ただし、被覆により黒葉腐病、葉擦れ、葉焼け等が発生しやすくなるため、気象状況に注意しましょう。

整枝は、二番茶摘採の7～10日後を目安に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。

2 二番茶摘採後の茶園管理

施肥は、二番茶の摘採前後に地域の施肥基準に準じ、速効性肥料の施用を行います。

チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病等の病害に対する防除は、三番茶の萌芽～開葉期に地域の基準に準じて実施しましょう。

3 茶園の更新

深刈り更新は、樹勢を考慮し、早めに古葉が残らない高さで実施します。更新作業が遅れた場合や干ばつが予想される場合には、樹勢の回復が遅れることがあるため、強剪枝は控えましょう。

一番茶後に中切り更新を行った茶園では、その55～60日後に、中切り面より3cm程高い位置で1回目の整枝を行います。

(新 正仙)

◆しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌系は、5℃～35℃で生長し、約25℃が伸長の最適温度とされています。しかし、35℃以上になると死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

また、梅雨時期はほだ木への害菌の侵入が活発になる時期ですので、風通しを良くするため、草の繁茂状況に応じた下草刈りを行いましょう。

2 ほだ場の管理

梅雨に入る前に防風ネット等の撤去、周囲の雑草木の刈払いや除伐等を行い、伏込み地と同様、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、ほだ場の環境を改善しましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、未発生部からしいたけが発生しやすくするため、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(奥野 慧)

関連情報

◆農作業安全

温度と湿度の上昇に伴い、熱中症の発生が増加します。

気温が高くなっている状況での作業は極力避け、こまめな水分・塩分補給で熱中症の防止に努めましょう。

◆農薬適正使用

6月1日から8月31日までの3ヶ月間は農薬危害防止運動を実施しています。

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病

害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後は、必ず散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

県内においても、過去に残留農薬基準値を超過した事例や、誤った方法で使用した事例が確認されており、十分な注意が必要です。

特に、農薬ラベルの確認不足、隣接ほ場への飛散、散布器具の洗浄不足が原因の事故・違反が多いため、細心の注意を払いましょう。

また、国内において、毎年クロルピクリン剤による事故が発生しています。クロルピクリン剤による土壌消毒を行う際は、必ず保護メガネと防護マスクを着用し、処理後速やかに被覆を行うなど、使用方法を遵守しましょう

(農業普及技術課)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	いもち病 葉いもち 穂いもち	並 —	葉いもちの発生は穂いもちの発生につながります。九州南部地方の1か月予報では、平年より気温は高く、降水量は多い予報であることから、いもち病の発生に好適な気象条件になることが予想されます。ほ場をよく観察し早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年、被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期の穂揃い期とその7～10日後の2回防除を行うと効果が高くなります。 また、水田内及び周辺のイネ科やタデ科などの雑草、イネ科の飼料作物は、出穂開花前に早めに刈り取りましょう。
普通期水稻	いもち病 葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	やや多 やや少	アブラムシ類は、キュウリのモザイク病やタバコの黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。媒介虫は次作のウイルス病の発生源になるため、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉して媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	ハダニ類	並	ハダニ類は親株から苗に移行・増殖するため、ほ場をよく観察しながら、早期発見、早期防除に努めます。薬剤は葉裏にもかかるようにていねいに散布します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	県内4か所に設置している予察灯では、果樹カメムシ類の誘殺数は平年並となっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるため、園内外を見回り早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメやモモなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	黒点病※ そうか病 かいよう病	多 やや多 並	黒点病の発生が多くなっています。枯枝は有力な伝染源となるため、園外に持ち出し適切に処理してください。 そうか病の発生がやや多くなっています。降雨が続くと発病が多くなり果実への被害につながるため、適期散布に留意し、防除時期が遅れないようにします。
	ミカンハダニ アブラムシ類 ミカンハモグリガ	並 並 並	ミカンハダニは、生息密度が高くなると防除が困難になるため、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホリガ カンザワハダニ※ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカガラムシ	並 並 並 並 多 並 やや少 やや多	炭疽病は、降雨が続くと発病が助長されます。今後、気温は平年より高く、降水量は多い予報となっており、発病の増加が予想されるため、萌芽期～成育期の防除を徹底します。 新芽生育期におけるチャノミドリヒメヨコバイの加害は減収、品質低下の原因となります。また、チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。 炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは、新芽生育初期に同時防除が可能です。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。 カンザワハダニの発生が多くなっています。低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は病害虫発生予察注意報を発表中です。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、QRコードより閲覧してください。

